



今月の主な目次

- 周産期病予防が、繁殖・生産性向上のカギ
- 放牧管理のポイント
- 寒地型芝生の造成と管理のポイント
- 雪印エスカリウの使用方法

時の話題

自給飼料をめぐる いくつかの話題

1. 集約放牧技術を導入しませんか？

乳牛の高泌乳化が進む中、北海道でも放牧飼養される乳牛が減ってきておりました。“乳量変動が大きい”“乳成分が低下する”“草地に余裕がない”、などの理由で敬遠されてきたわけです。従来の放牧飼養方法には、確かにそのような側面が内在しておりました。

それらの問題点を克服する技術として、【集約放牧技術】が確立し、点ではありますが、徐々に増加の兆しが見えてきました。その技術要点は、①電気牧柵を利用して、日々（毎日）牧区を切りかえる。②草地を放牧と刈取りの兼用利用とし、草量の多い時（一番草）は、一部を刈取り利用とする。③季節による草量の変動は、牧区面積の多少や切替え日数で調節する。④高栄養牧草（ペレニアルライグラス、チモシー、フェストロリウム、等）を活用する。⑤常に、牛の栄養バランスを配慮し、補助飼料での栄養補正を怠らない。等で、いずれの項目も重要です。一部分をはしよるようなことは避け、全体でバランスをとる事が大切です。

放牧の利点として、“管理に手間がかからない”“軌道に乗れば、費用がかからない”“牛が健康になる”などが挙げられ、新しい放牧技術、即ち【集約放牧技術】の正しい理解と実践によって、これらのメリットを手中に収めてほしいと思います。弊社、北海道研究農場では、平成9年より、中規模ではありますが、フリーストールとの組み合わせで、放牧を実践しております。

2. アルファルファ草地を活用した高泌乳牛の飼養

北海道農業研究センターにおける地域総合研究の新しい成果として、“アルファルファ単播草地を利用した高品質飼料生産”が、今春より技術普及に移されることになりました。

狙いとしては、従来のトウモロコシとイネ科主体牧草から成る飼料生産体系に、高栄養のアルファルファを導入し、より高品質な自給飼料生産と給与技術の開発によって、畑地型酪農の営農システムの充実と確立を図るものです。

技術の組み立てとしては、①アルファルファ新品種の活用（マキワカバとヒサワカバ）、②新しい単播草地の造成法（除草剤処理同日播種法）、③新しい飼料調製用機械の開発（フォレージマットメカ）、④高栄養アルファルファの収穫（草丈80cmを目途に刈取り）⑤高泌乳牛へのアルファルファ給与（泌乳最盛期での高乾物摂取量の維持）、等で、雑草に負けないアルファルファ草地の造成が、そのスタートとなります。

3. イネのサイレージ利用専用乳酸菌製剤の開発

稲発酵粗飼料の生産は、遊休水田の有効活用、飼料自給率の向上、水田機能の維持、資源循環型農畜産の推進、等の観点より、普及に向けた取り組みが、主として府県を中心に展開されています。

その安定した利活用に資するため、（独法）畜産草地研究所と埼玉県農林総合研究センターとの共同研究によって、乳酸菌「畜草1号」の製剤化に成功しました。

道内での利用場面は限られておりますが、稲わらサイレージ等での活用も出来、話題提供として、お伝えさせていただきます。（研究本部長 山下 太郎）